

たなか のりゆき
田中 德行

ヨークシャー・プディングに思う

●日本郵政グループ労働組合
(JP労組)・中央副執行委員長

2014年3月に欧州（イギリス・ベルギー・オランダ）の郵便事業体の民营化（株式会社化）と上場の実態について、現地でのヒヤリングに訪問する機会をいただいた。特に、2013年10月に新規株式公開してまだ間もないイギリス・ロイヤルメールにおいてはホットな状況でもあり、斜陽産業ともいわれる郵便事業を民营化し、いかに労働者保護と事業の活性化を両立させるか、物流事業と窓口ネットワークとのシナジー戦略など、イギリス流の努力と経験に直に触れたことは大変貴重なことであった。なお、詳細な内容はすでに報告書や「JP総研Research」の26号にて公表させて頂いているので、ここでは割愛させて頂く。

出発直前まで連日深夜に及ぶ春闘交渉を終え、出発前から時差ボケ状態のままロンドンに到着したのは3月15日。翌日は日曜日で市内視察しかすることがなく、ビッグベンやバッキンガム宮殿、市内の郵便局やポストなどを眺めたあと昼食は定番のローストビーフと相成った。イギリスではサンデーローストと言われ、ローストした肉、ジャガイモ、ヨークシャー・プディング、ファルス、野菜等の付け合わせをグレイビーソースで食するものを日曜日（通常正午過ぎの昼食）に供される伝統的な食習慣があるとのこと。起源は産業革命時代のイングランド・ヨークシャーにさかのぼり、金曜日にはパン屋がパンを焼くことができなためオープンで肉を焼いて、この伝統が出来たという説があるそうだ。よくイギリスの食事はどれも不味いといわれ覚悟していたもののローストビーフはたいそう美味であった。しかし付け合わせについてきたヨークシャー・プディングなるシュークリームの皮だけを黒焦げにしたような物体が2～3個。たぶんパンの代わりだと思うが、味が無いうえ、見た目も甚だ異様で、とても食

欲をそそるものではなかった。かくして「ロンドン＝美味しいローストビーフとたいそう不気味で不味いヨークシャー・プディングのセット」が印象深い記憶となってしまった。

そもそもイギリス料理の評判の低さの原因は、野菜は本来の食感がわからなくなるほど茹でる、油で食材が黒くなるまで揚げる、などといったイギリスでよく行われる食材本来の味を残さないほど加熱する調理法にある。しかも食べる人の好みに応じて塩や酢などで味付けされることを前提としているため、調理の段階で味付けらしい味付けはされないことも多く、不慣れな旅行者は味の無い料理に困惑することになる。結果として、イギリス料理で美味しく食べられるものは、せいぜいローストビーフやステーキ程度という評判が定着したようだ。

ノーベル賞経済学者のポール・クルーグマン氏によれば、イギリスの食事がまずいのは、生鮮食品を安く大量生産し、保存し、遠くまで輸送する技術が生まれる前に産業化が内陸の都市部まで進んでしまったのが原因だという。ヴィクトリア朝時代のロンドンでは、食品は馬が引く屋台で運ばれていた。当時は缶詰めや冷蔵による保存の技術はなく、不味くても保存がきく食品に頼らざるを得なかったようだ。その後、科学技術が発達して生鮮食品を充分に運べるようになった頃には、ヴィクトリア朝時代の不味い食事はすでにイギリス文化に定着していたとある。そういわれれば、日本は海にも山にも近く、食材の豊富さや新鮮さにおいて比較的有利な地形だ。ユネスコ無形文化遺産となった「和食」の成り立ちや変遷についても思いを馳せた次第であるが、和食のみにかかわらず、この環境で育まれた日本人の味覚こそが食文化を支える礎であり、無形文化遺産そのものなのだとも思った。



さらに、ヨークシャー・プディングにあまりにも納得いかずいろいろググっていると、前述のポール・クルーグマン氏にまたぶつかった。そこで彼は、日本の消費税が10%に達すれば、デフレ不況に逆戻りし悲惨な状態になると主張していた。さらには安倍首相が間違っただけの人の声に耳を傾けてしまい、日本の景気回復は4月の5%から8%への消費増税で危うくなったと。そもそも10%への税率引き上げについてはエコノミストの間でも意見が割れていたが、ある内閣官房参与は、ウォール・ストリート・ジャーナルのインタビューで1年半先送りすべきなどと述べていた。結局、首相は先延ばしを表明し、2017年4月に消費税を10%にまで引き上げるとし、唐突に衆議院を解散し、アベノミクスの信を問うとした。結果は、悔しくもアベノミクス解散の与党戦略は奏功し、経済政策は信任された形になってしまった。しかし、世論を顧みない、大義なき、党利党略の象徴的解散として後世に汚名を残すに違いない。わたしの個人的には、政策議論が不在のうえ国民に望まない師走の総選挙を押し付けた「ヨークシャー・プディング的解散」とでも命名したいくらいだ。

さて、イギリス・ロイヤルメールの労働組合はCWU (The communications union) という。事務所はロンドン中心部から西南に約20キロ程郊外、あのテニスの聖地ウィンブルドンにある。ヒヤリングには、UNI世界郵便ロジスティクス部会議長もされている書記長のビリー・ヘイズ氏をトップに、丁寧に対応していただいた。

ロイヤルメールの株式公開にあたって、10%の株を従業員に無償譲渡することや年金基金約80億ポンドの積み不足分を政府が負担することは日本でも報じられていた。それでも彼らは、株式公開に反対するとともに

ストライキ確立78%批准を背景に交渉し、3年間で9.06%賃金アップすることを合意させたうえで、①アウトソーシングや事業を部分的に売却したりしない、②フランチャイズ化しない、③従業員を自営業化しない、④新しい従業員を採用する際にはそれまでの従業員と同じ条件で採用する、⑤条件を変更する際には合意に基づいて変更する、⑥組織再編する際には解雇なく組織再編を行う、と言った合意も取り付けていた。また別の側面では、株の売却資金をEU域内で出遅れていたロイヤルメールの競争力をつけるために投資していくなど、いわゆる成長戦略が様々な検討されていた。さらには、雇用や労働条件など労使の機微にかかわる事項について円滑に協議する方策、すなわち労使の衝突リスクを回避する新たな仕組みを構築していた。

英国においてもこれまで積み上げてきた雇用の質を維持しつつ、市場化の脅威に立ち向かうために「競争力」を強化する様々な方策が練られていたことが印象的だった。引き続きCWUの健闘を祈りたい。

ビリー書記長はリバプール出身。サッカー・プレミアリーグのリバプールFCとご当地ビートルズの熱狂的ファンである。特にビートルズに関してはオタク級で「すべてのシングル盤のB面まで暗記しているぞ!」と何でも聞いてくれ状態。一見頑固そうな中にもとてもユーモアに溢れ、労働組合発祥の地らしく繊細な判断力と豪快な決断力を持ち合わせた指導者であろうとの印象を受けた。

会談後、名残惜しくお礼を述べると、思いがけずランチに誘っていただいた。その時、ビリー書記長曰く。「せっかくロンドンに来ていただいたので、ランチはイタリアンにしよう!」(笑)。かくしてヨークシャー・プディングではなく、美味しいピザとパスタをこたまごちそうになったのである。